

平成 2 2 年度東京都広報コンクール

実 施 結 果

平成 22 年度東京都広報コンクール実施状況

区市町村の広報力の向上と、都と区市町村との連携による広報活動の充実を図ることを目的に、平成 22 年度東京都広報コンクールを下記のとおり実施した。

1 応募状況

(1) 応募作品数

部門	応募作品数
広報紙部門 区市部	31
広報紙部門 町村部	3
写真部門 一枚写真の部	12
写真部門 組み写真の部	12
映像部門	19
応募総数	77

(2) 応募区市町村数

37 区市町村（19 区・14 市・4 町村）

2 審査会

平成 23 年 1 月 25 日（火曜日） 東京都庁舎内会議室

3 審査委員

別紙「平成 22 年度東京都広報コンクール審査委員名簿」のとおり

4 審査結果

別紙「平成 22 年度東京都広報コンクール入選作品一覧」のとおり

なお、(社)日本広報協会「全国広報コンクール応募要領」の応募基準に該当する各部門の上位の作品については、「平成 23 年全国広報コンクール」に東京都推薦作品として応募する。

5 表彰式

平成 23 年 3 月 9 日（水曜日） 東京都庁第一本庁舎 33 階特別会議室 S5

平成22年度東京都広報コンクール入選作品一覧

部門		賞	区市町村名	作品名	全国推薦
1 広報紙 (34)	(1)区市部 (31)	最優秀	足立区	「あだち広報」4月10日号	○
		一席	豊島区	「広報としま」3月25日号	○
	(2)町村部 (3)	二席	大田区	「おおた区報」7月21日号	
			八王子市	「広報はちおうじ」8月1日号	
2 写真 (24)	(1)一枚写真の部 (12)	最優秀	八王子市	「広報はちおうじ」7月1日号	○
		一席	板橋区	「週刊広報いたばし」7月31日号	
		二席	千代田区	「広報千代田」4月20日号	
			日の出町	「広報日の出」9月1日号	
	(2)組み写真の部 (12)	最優秀	足立区	「あだち広報」12月10日号	○
		一席	江東区	「こうとう区報」4月1日号	
		二席	日の出町	「広報日の出」2月1日号	
3 映像 (19)		最優秀	台東区	台東スケッチ「おもてなしの支度」	○
		一席	足立区	「気づく つながる いのちを守る」～足立区の「生きる支援」～	
		二席	江戸川区	えどがわ区民ニュース平成22年6月号特集 守る 創る 語り継ぐ 環境をよくする運動40年のあゆみ	
			福生市	福生市制施行40周年記念映画 ぼくのまち わたしのまち 福生	

* 表中()内の数字は応募作品数。なお、応募区市町村数は37(区市町村)。

* 全国推薦は、入選作品のうち、全国広報コンクール応募要領の応募基準に該当する各部門の上位作品とする。

平成22年度東京都広報コンクール応募作品審査委員名簿

部門	氏名	現職等	専門分野
広報紙	大井眞二	日本大学法学部新聞学科教授	マス・コミュニケーション論等
	長岡光弘	グラフィックデザイナー(株式会社たき工房)	広報紙のレイアウト編集等
写真	高村 規	(社)日本写真家協会名誉会員 (社)日本広告写真家協会顧問 高村光太郎記念会理事長 (財)清春白樺美術館評議員	写真一般
	大石芳野	(社)日本写真家協会会員 フォト・ジャーナリスト	写真一般
	小林信行	東京都生活文化局 広報広聴部広報課写真担当係長	行政広報写真等
映像	関 裕敏	(株)電通 第4クリエイティブ局長	広告企画・制作
	高橋幸作	(株)NHKエデュケーショナル 特集文化部統括プロデューサー	映像企画・制作
※この名簿は、一般には公表しておりません。お取扱いにはご注意ください。			

広 報 紙 部 門

〈広報紙部門 総評〉

●大井委員

昨年と比べると、かなり力のこもった、充実した作品が多かった。今年の事前審査を終えて、まずそんな感想が浮かんだ。何故だろうかを考えてみる。再び応募作を読み返す。いくつか思い浮かんだけれども、まとめていえば、限られたスタッフ、予算など様々な制約にも関わらず、斬新な企画、記事の切り口、文章表現、レイアウトなど、いろいろな創意工夫を凝らしたことが伺える作品が多く、時にはその工夫の跡がしのばれて、微苦笑してしまったこと、に尽きるだろう。その上で、いくつか注文やらアドバイスをしてみた。

第一は、「楽しんで作ること」である。仕事であるから当然楽しいことばかりではなく、時にはつらいと思うこともあるだろう。作業が進まず時にはイライラが高じることもあるだろう。しかし、こうした思いは意外に広報紙にあらわれてしまうものである。製作者が仕事を楽しくしているか、そうではないかは「しのぶれど、色に出にけり」なのである。

第二は、「季節感をすくい上げることの重要性」である。日本は四季に恵まれ、その折々に様々な行事などが催される。さりげなく地域の季節感を取り入れる。広報紙を手にとつて、「こんな季節になったのか」といった感慨を持って、読まれる読者も少なくなかろう。広報紙だけでなく、こうした切り口から読者を引き込んでいくことは大事な手法である。読者はいつでも読むことを止めることができる。最後まで読んでいただいてこそ、何からのリアクションを期待することができるのである。

第三は「マンネリズムとどう立ち向かうか」である。一般にマンネリと言ってあまり良い意味には使われないが、マンネリの効用もあるのである。毎号紙面が変わってしまつては、必要な情報になかなかとり着けない。慣れるまで使いづらいついたことが起こるだろう。企画記事はいざ知らず、情報提供、お知らせなどのページは、高度なマンネリが必要なのである。しかし、ある種のフォーマットについてマンネリは必要だが、表現は別物である。ただ伝えればいいと思っていないだろうか。絶えず、もっといい方法があるのではと模索することが大事なのである。ここではマンネリ打破が必要なのである。

第四は、「時代を先読みすること」である。かつて有能な広報パーソンに聞いたこんな話がある。その年の冬は、暖冬だったのか、積雪量が多かったのか、といった情報を分析して、夏はどうなるか、水不足が予想されないか、を先読みして、それに備える。「時代を先読みする」は大げさかもしれないが、常に先の展開を読むことは、広報紙にとって重要な心構えではなかろうか。今は亡き評論家の扇谷正造氏は、「ジャーナリストは時代を半歩前すすむ」ことが大事であると説いた。この半歩前の精神は、広報パーソンにとっても重要だと思われるのである。

〈広報紙部門 総評〉

第五は、「広報紙の再点検」である。広報紙といえども定期刊行物である。製作にあたっているスタッフにとって、この発行のサイクルは、立ち止まって考えてみる機会を奪いがちである。校了後すぐに次号にとりかかる。なかなか「広報紙とはなにか」を改めて問い直す機会などに恵まれないかもしれない。しかし、この原理論的問題を、「広報紙はどのように利用されているか」、「一方的な紙面づくりになっていないか」、「届けるべき情報はきちんと受け止められているか」といった問題に置き換えたらどうだろうか。これらの問題は、時を置いて、吟味する必要があるだろうか。一方的な紙面づくりになっていないか、届けるべき情報はきちんと受け止められているのか。

第六は、「町（人）の声を拾い上げる」である。人間にとって一番興味のあるのは人間であって、とりわけ自分である。ジャーナリズムの世界ではこうした声を拾い上げた記事を、「町ダネ」という。実は意外に読まれているものなのである。何かの折に、自分や周囲の人に焦点があたり、紙面に登場する。本人及び関係者にとってはこの上もない喜びなのである。広報紙の基本方針や紙面の制約もあって、この種の試みは難しいかもしれないが、コラムのようなフォーマットで扱うことは可能であろう。身近さ、親しみ易さ、読者との距離の近さ、は広報紙の魅力につながる。英国ジャーナリズムの父と呼ばれたダニエル・デフォー（ロビンソン・クルーソーの著者）は、ひとに影響を与える文章の基本は「楽しませること」と喝破した。

第七として、「楽しませること」に通じるのが、今回の応募作「あだち広報」である。詳しくは同作品を読んでいただくしかないが、ルポ風の、ドキュメント風の作品であって、写真と言ひ記事と言ひ、「楽しませる」工夫や仕掛けが凝らされており、思わず引き込まれてしまった。「開かずの踏切」の問題が解消されたそれだけのレポートなのだが、問題のアプローチや組み立て方によって、秀逸なレポートになった。その根底にあるのは、「読ませよう」「楽しませよう」という思いだったのではないだろうか。

最後になったが、仕事柄、たくさんの広報紙を読む機会がある。そこで痛感するのは、読み比べの重要さである。他区町村の広報紙を単に読むだけでも随分と参考になるものがあるはずである。もしあまりそうした機会がなければ、一度お試しあれ。

〈広報紙部門 総評〉

●長岡委員

行政広報紙には、暮らしに必要な情報、今後の暮らしに必要な情報、地域の将来像など、地域に必要な膨大な情報が掲載されている。今回の審査紙を拝読すると、多くの情報を掲載するため、概要のみ語る紙面が多く、良いアプローチの企画であっても、編集物として物足りない紙面が気になる。社会的な背景、地域の目線などを盛り込み、編集物として記事に興味と深みを持たせることが望まれよう。そのためにも、全ての情報を掲載するのではなく、情報の絞込みと情報の重要度に対応した、掲載面積の設定が求められよう。

視覚表現面では、外部協力者への依頼による紙面作りが多く見受けられる。その分、行政側のディレクション力が紙面に現れる。その観点から紙面を見ると、本文組みで可読性に問題がある紙面は少なく、写真・イラストを活用し魅力ある紙面表現を多く見受けられる。ただ、啓発・啓蒙情報などの表現で、視覚アイディアが乏しく印象の弱い紙面も見受けられた。印象に残る表現を創出するために、より住民目線に立った表現ディレクション力の技に磨きをかけたい。

多くの住民に広報メディアの感想を尋ねると、中高年層から次のような声が聞こえてくる。WEBには多くのコンテンツが掲載されているため、希望の情報を検索するのが億劫だ。モバイルは、画面が小さいために目が辛く長文を読むと目が疲れる…。様々なメディアが存在する中で、最近、広報紙メディアの存在が再認識されている。広報紙には、時間を気にせず気になる情報を手にとってゆっくりと読むことができる。その意味からも、広報紙メディアの記事を通して住民一人ひとりと行政の架け橋になるよう、広報担当者の編集技量にさらなる進化を期待したい。

平成22年度東京都広報コンクール 広報紙部門 入選作品



最優秀 足立区

あだち広報 平成22年4月10日号

発行部数(回数): 30万8,900部(24回)

判型(平均ページ数): タブロイド判(12ページ)

担当者数: 4人(専任4人)

●竹ノ塚駅の「開かずの踏切」立体化事業に関わる企画は、ルポなどを生かしたドキュメントタッチのアプローチが成功した。1面の現場の写真の迫力、2, 3面のそれぞれの展開もリアリティに富み、重厚で、読み応えのある特集に仕上がっている。6, 7面の「近い、安い、楽しい、あだちのGW特集」は、見開きを生かし、参加の誘導を巧みに促す紙面になっている。(大井)

●部署間の協力で紙面を作り上げた1～3面は、読む人を惹き付けるドキュメンタリーの持つ強さが発揮された編集である。編集表現も、大きく用いた写真が遮断機の音が聞こえそうである。今までの経過と計画を紹介した紙面、記事の公平性を考えての多方面での取材記事など、バランスの良い構成となっている。担当者の熱意に拍手を送りたい。(長岡)



第一席 豊島区

広報としま 平成22年3月25日号

発行部数(回数): 114,500部(36回)

判型(平均ページ数): タブロイド判、8ページ

担当者数: 5人(専任4人、兼任1人)

●「さくら特別号、春爛漫お花見に出かけよう!」は文字通り、季節感あふれる特集。参加の誘導性は高く、カラフルな紙面に誘われて、思わず出かけようかな、と思わせる企画に仕上がっている。また写真がその魅力を高めている。ただ、ソメイヨシノ発祥地「駒込」の紹介は、やや平板な印象がある。もう一工夫が必要ではないだろうか。(大井)

●広報には訴求情報のニュース性とタイミング(発効日)が重要となる。その意味で「さくら特集」は、的を得た好企画といえる。1・8面のカラー面を用いた迫力ある紙面に、訴求効果が期待できる。2面も、訴求力のある紙面編集である。今回の企画を1年前に考え撮影した、担当者の熱意が紙面から伝わる。(長岡)

平成22年度東京都広報コンクール 広報紙部門 入選作品



第二席 大田区

おおた区報 平成22年7月21日号

発行部数(回数): 238, 000部(35回)

判型(平均ページ数): タブロイド判(4ページ)

担当者数: 3人(兼任3人)

●「技術を未来へ 大田の工匠」は、地場の産業を見直すだけでなく、将来を見据えた展望が示されており、企画の構想力を評価したい。ただ工匠受賞者一覧は、もう一工夫必要ではないか。得意分野の紹介がやや分かりにくくイメージを浮かんでこない。4頁建てながら、種々の情報がコンパクトにまとめられており、すっきりしており読みやすい作品に仕上がっている。(大井)

●1面の「大田区の工匠」は、企画が良い。ただ残念なことに、企画意図に対して掲載紙面では、表彰がメイン表現となり悔やまれる。紙面スペースの問題もあるが、匠が減少している背景、匠継承を行うための行政施策も詳しく紹介し、編集に深みを出したい。視覚表現は、色・レイアウト・図版の使い方など、他の紙面も合わせて上手である。(長岡)



第二席 八王子市

広報はちおうじ 平成22年8月1日号

発行部数(回数): 198, 300部(24回)

判型(平均ページ数): A4判(16ページ)

担当者数: 9人(専任2人、兼任7人)

●特集「第50回八王子まつり」は、50回という節目にふさわしい力のこもった紙面に仕上がった。「人とまつり」というアプローチが、登場する人物選定や祭りの考察を含めて、企画を重厚かつ読み応えのあるものにした。6頁の「この水どこから」は、水の日になんだ企画だが、切り口をちょっと変えた点が成功している。こうした視点の切り替えは意外な効果を生む。(大井)

●特集は、「まつり」にかける市民の熱い想いを通して、地域愛を感じる編集である。50年の歴史も写真で構成されており、市民に「まつり」の変化を視覚的に感じる表現となっている。最終紙面ではホームページに関して語っているが、URLは見当たらない。情報の細部にも注意したい。表現面は、写真を多彩に用いて表情豊かな紙面である。(長岡)

写 真 部 門

〈写真部門 総評〉

(一枚写真の部)

●高村委員

1枚1枚は、カメラの性能もよくなっているし、撮影経験も積んできていることもあるのか、全体的なレベルは年々上がってきている。

また、中には掲載テーマに即して、表情がとてもよい写真も見られた。

ただし、区市町村によって、写真技術の落差が大きい。職員が撮影している場合もあれば、プロが撮影している場合もあると思われ、同じレベルで評価するのは気の毒ではある。

●大石委員

昨年のコンテストの感想を生かして、ぐんと良くなった自治体もあれば、変わらず残念に思う自治体もある。

コンテストに応募する写真を撮影した方のうち、プロの写真家は少ないと思う。しかし、皆が写真を撮る対象とコミュニケーションをとっていけば必ず良い写真が撮れる。

また、写真が良くても広報紙の中で生かされていないものに関しては、なかなか上位に入選しないケースもある。文字を読んでほしい記事でも、もっと写真を大きく使って、まず写真で読者の目を引き、記事に関心を持ってもらうということを意識したレイアウトが望ましい。

●小林委員

写真の素材は良いのに、広報紙面での構成やトリミングの仕方により活かしきれない紙面であったり、紙面上の写真サイズをもう少し大きく構成したら、より説得力のある紙面になったと思われる広報紙が多く残念であった。

写真表現の良し悪しは、被写体を知り理解するところから始まる。カメラというメカを駆使していかに光を読み、無駄を省き、テーマの核心を具現化できるかということにつきる。

一方で、読者の身近なテーマを取り上げ、質の高い写真が年々増えてきたので今後に期待したい。

〈写真部門 総評〉

(組み写真の部)

●高村委員

組み写真は、1枚1枚の集積で全体の流れが良くも悪くもなり、専門家でも難しいが、その中でも撮影の意図がよくわかる作品が何点か見られた。

組み写真の注意点としては、あまり写真の枚数が多いと、テーマが伝わりづらいことがあるため、点数を絞ったほうが効果的な場合も多いことである。説明がつかないから写真を何点も入れるというのは良くない。全体を見てセレクトの必要があるかないか検討すべきである。

ただし、撮影者本人だとなかなか写真を絞ることが難しいこともあるとので、第三者の視点を入れるのも効果的である。

全体的には、年々レベルは上がってきている。

●大石委員

組み写真はプロの写真家でも難しい。写真の大小をつけること、写真自体の中のアップと中ロングとロングのメリハリをつけることが大事である。

記事のスペース中に写真をたくさん並べれば良いというものではない。意味を持った組みになるように工夫がされたら、もっと良くなったであろうと思えるものがあつた。

2枚でも10枚でも組み写真である。読者が納得するような記事となるよう構成を考えたら良いと思う。

●小林委員

テーマに対して使われている写真が似かよった素材を多用しすぎて、伝えようとする主旨が弱くなってしまう傾向がある。キャプションと同じように写真構成の起承転結を考慮し、写真サイズにメリハリをつけ、観る人に解りやすく訴えかけられるように心がけて欲しい。

写真を使わない広報紙は少ないと思う。写真点数やレイアウトを工夫し、文字とのバランスを考慮した紙面づくりがポイント。

平成22年度東京都広報コンクール 写真部門(一枚写真の部)入選作品

最優秀

区市町村名	八王子市
広報紙名・掲載号	広報はちおうじ 平成22年7月1日号
意図	7月1日号では、平成21年度の決算概要を特集した。平成21年度の予算は、まちの元気や活力を守ることに主眼を置き「元気計画推進予算」として編成。応募写真は、この特集の1面を飾る1枚である。 平成21年度は世界的な不況にもなっており、本市にも不況の影響が波及した。本市にはものづくりを中心とした技術力の高い中小企業が集中し、市の強みとなっている。そこで厳しい経済背景の中でも、頑張る企業の活力を市民の方に紹介したいと思い撮影した。 写真の撮影に協力していただいたのは、精密部品加工を手がける企業。写真左の祖父が作業を行い、その様子を見つめる写真右の孫。その互いの真剣な眼差しから、不況の中でも活力に溢れ、次の世代へと技術を守り、つなげていこうという気持ちが現れている瞬間だと思い、シャッターを切った。
審査委員コメント	●室内で暗く、撮影条件が悪いところだと思われるが、明るく撮れており、写真技術がしっかりしていて良い写真である。 若者を育てるという掲載意図もよく伝わってきており、真剣な表情が良い。町工場ががんばっているということも話題性がある。 ●孫の真剣な表情と祖父の真剣ながらやさしさがにじむ表情がとても良い写真。広報紙上で1枚大きく写真を使うとインパクトが出る。全体的に良い。 カラーのままの方が良かった気もするが、広報紙の白黒写真としても十分に成り立っている。 ●二人の表情から、仕事に真剣に取り組む姿勢や、技術を次の世代へと継承していこうという強い気持ちがよく伝わり、「元気や活力」というテーマをストレートに表現できている。

第一席

区市町村名	板橋区
広報紙名・掲載号	週間広報いたばし 平成22年7月31日号
意図	板橋区の夏の風物詩である「いたばし花火大会」は、今年で第52回を迎え、毎年大勢の方々が来場し、愛され続けています。広大な荒川の河川敷の川面には、たくさんの屋形船が集まり、ノスタルジックで印象的な構図を狙いました。 さらに、今大会では日本を代表する花火の名匠10人による「芸術玉」の競演が披露されました。数々の競技会を勝ち抜いてきた鉄人達が描く美の極致をおさめられれば、と思いました。
審査委員コメント	●「たくさんの屋形船が集まり」という撮影意図にしては、にぎやかに集まっている様子が目立たず残念だが、花火そのものはめずらしくきれいに撮影されている。 ●花火が色も形も良く撮れていてきれいな写真。荒川に街の灯が反射しているのも良い。板橋区が元気であることが写真から感じ取れる。広報紙上においても、写真1枚で花火を「どん」と大きく見せてくれて印象に残る。良い写真の使い方をしている。 ●ここしかないという一瞬のシャッターチャンスを捉えている。写真から夏の雰囲気がよく伝わってくる。 上下の余白を残した縦長の写真を使用したり、写真の右端に配した白い文字を写真の外に出すともっと良かった。

平成22年度東京都広報コンクール 写真部門(一枚写真の部)入選作品

第二席

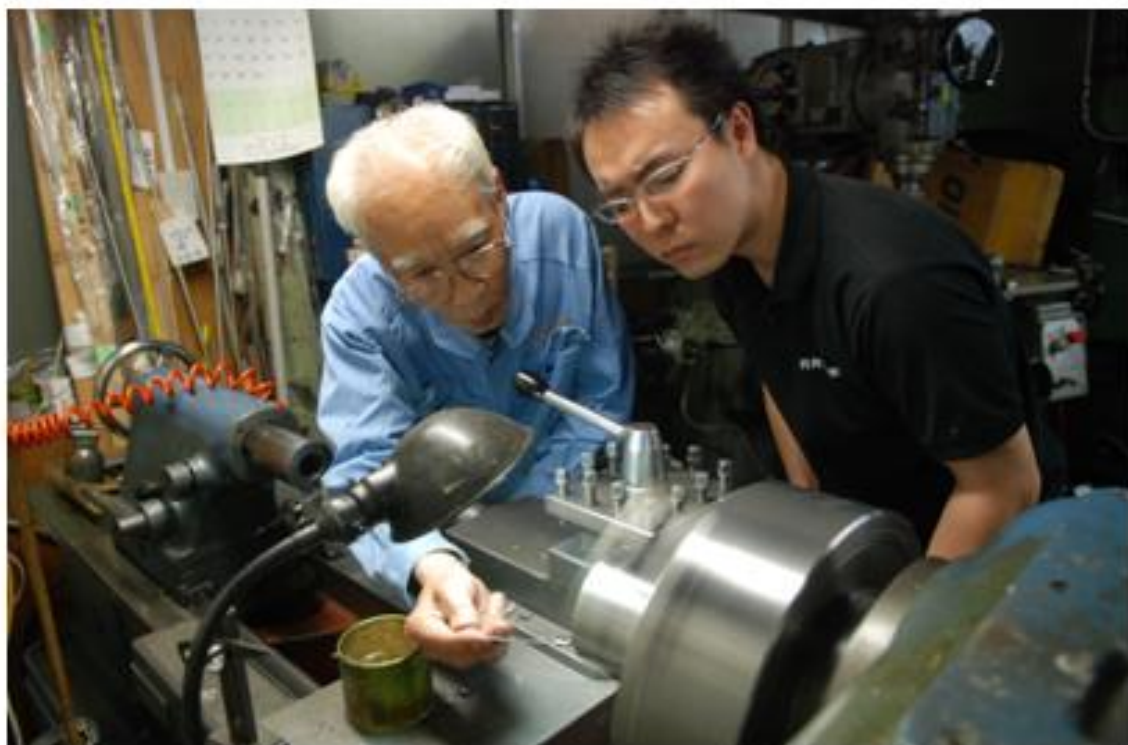
区市町村名	千代田区
広報紙名・掲載号	広報千代田 平成22年4月20日号
意図	最近、大人だけではなく、子どものメタボリックシンドロームなどの生活習慣病が増加しています。また、朝食を摂らない子どもの増加が問題となるなど、「食」が子どもの健康に与える影響の大きさから、「食育」の重要度が高まっています。今回の写真は、健康の基本である「食」を表現するため、子どもたちが元気いっぱい、おいしく、楽しく給食を食べる表情をメインにし、食べる喜びが伝わるような写真を掲載しました。 さらに、記事が読み飛ばされないように、区民が目にする機会の少ない学校の給食風景の写真を掲載することで、読者の目を引くことも意図しています。写真をきっかけに、読者が記事を読み「新・ちよだ食育ガイド」や講座、「食育」そのものについて関心を持ち、家族や子どもたちの間で話し合うきっかけ作りになればと思い今回の写真を掲載しました。
審査委員コメント	●写真については、なかなかこう全員の表情がそろったものではなく、明るく健康的でよい。掲載テーマにあっている。 写真コンクールだったらさらに良い賞であったが、広報紙への掲載の仕方が残念である。もっと写真を大きく掲載すれば評価できた。 ●学校の教室で給食をうれしそうに食べている様子がよくわかり、撮影者と児童とのコミュニケーションがとれている良い写真である。 広報紙上でこの写真が大きく使われていればさらに良い賞だった。非常に残念。 ●教室の雰囲気や子供達の表情をうまく捉えており、テーマである「食育の大切さ」が写真から伝わってくる。 紙面の写真がオリジナルの写真よりも暗く印刷されてしまっているのが残念。

第二席

区市町村名	日の出町
広報紙名・掲載号	広報日の出 平成22年9月1日号
意図	夜に行なわれた祭り(国の重要無形民俗文化財「鳳凰の舞」)の情景を損なわないように高感度撮影を行なっています。 偶然、対面のフラッシュが画面に収まった画像を確認したところ、サイド光的で被写体に立体感が感じられ、また発光位置が白飛びするも、神秘的な雰囲気作りにも繋がっていました。撮影中に同様の写真をいくつか得ることが出来、そのうちの1点を表紙に選びました。
審査委員コメント	●人物に動きがあるものの、フラッシュについてはそれほど効果的とはなっていない。鳳凰の舞の情景についても、写真ではよくわからなくなっている。 ●右側の太鼓をたたく人にも対岸のフラッシュにより光が映り、表情がよくとらえられている。偶然ながら非常に面白い。写真をもっと大伸ばししても迫力あるものになるだろう。 広報紙上でも写真を大きく使って写真自体の強さを生かしたものになっている。 ●対面フラッシュにより面白い効果が出ている。 一方で、フラッシュに目を奪われてしまい、祭りの実体がよくわからないのが残念。

平成22年度東京都広報コンクール 写真部門(一枚写真の部)入選作品

一枚写真の部 最優秀 広報はちおうじ 平成22年7月1日号



平成22年度東京都広報コンクール 写真部門(一枚写真の部)入選作品

一枚写真の部 第一席 週刊広報いたばし 平成22年7月31日号



一枚写真の部 二席 広報千代田 平成22年4月20日号



平成22年度東京都広報コンクール 写真部門(一枚写真の部)入選作品

一枚写真の部 二席 広報日の出 平成22年9月1日号



平成22年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部)入選作品

最優秀	区市町村名	足立区
	広報紙名・掲載号	あだち広報 平成22年12月10日号
	意図	区が体験学習を通して、決して偏差値では図ることができない「たくましく生き抜く力」を子どもたちの中に育てる場を設けていること、子どもたちがその場の中で生き活きとしている事をアピールすることを意図とした。子育て世代、特に義務教育就学年齢の子を持つ親をメインターゲットに据えた。 田植えと稲刈りの写真で子どもたちが魚沼で何を体験したかを分かりやすく表現し、民宿や学校での食卓に付く生徒達の写真では、未知の体験と環境の中で仲間達と過ごすことが生徒にとってどれだけ心躍るかを表現した。 また春夏秋の写真を縦に配置し魚沼での季節の変化を表現し、苗から青田、稲へと変わるコシヒカリに生徒達の成長を暗示させた。なお、1面でも子どもたちが自ら作ったコシヒカリを炊き、椀に入れた写真と田んぼの写真を組んで使いインパクトをもたせ、6、7面に読者を誘導している。 当区では、5年前の学テ報道をきっかけに負の特徴がクローズアップされるようになった。長く区に住んでいる人でも一定の資力を持つと区を「使い捨て」にして転出してしまったりすることが憂慮されており、区民の意識調査でも「区に愛着はあるけれども誇りが無い」というのが現状である。その大きな理由のひとつと思われるのが教育面でのネガティブイメージである。それを払拭することを今回の紙面づくりでは強く意識した。単なる遠足リポートに留まらず、シティセールスの視点から紙面を構成した
	審査委員コメント	●すべての写真がよくなくても（いい写真やおもしろい写真又はそうでもない写真が混在していても）全体のイメージを統一できている。読み物となっているのでよい。 ●1点1点の写真は悪くないもので、生徒たちの米作りに対する喜びが伝わってくる。枚数をたくさん使用しているが、1年間を通した物語として組まれているのが良い。 ●似たような写真や、作業手順の写真など説明的な写真が多いことで、一つ一つの写真が小さくなってしまっているのが残念であるが、子供達の表情をよく捉えており、地域間の交流や収穫したお米のおいしさが伝わってくる。

平成22年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部)入選作品

第一席	区市町村名	江東区
	広報紙名・掲載号	こうとう区報 平成22年4月1日号
	意図	江東区の10年間の大きな指針「長期基本計画」が策定されたことを伝える記事として、イメージ写真は江東区の未来を感じられるものにしたいと考えた。そのためメインとなる写真には区の未来を担う「こども」を用い、そこに長期計画が内包するさまざまな行政分野のイメージを重ねることを思いついた。 メインとなる①の写真は、江東区で1番新しいまち豊洲で、公園に遊びに来ていた姉妹に光沢のあるボールを持ってもらい撮影。ボールには後から写真をはめ込むことを想定していたため、ボール周辺に光があたるよう、立ち位置を変えたり、ボールにフラッシュをぶつかけたりして撮影した。女の子たちが持っているボールに入っている写真や、後方に組んだ写真は、別の機会に撮影してあったものから。芝生の上を走る女の子は「環境」、左下はいきいきと活動する「高齢者」、右上は江東区を特徴付ける内部河川の和船乗船体験として「伝統文化」、中央上のカワセミは区内亀戸天神に飛来していたものを撮影し「緑・自然」のイメージとして用いた。新年度最初の区報、長期計画スタートの区報ということで、区の明るい未来を感じられるよう、明るいイメージとなるよう心がけた。
	審査委員コメント	●各々いい写真が多く、高齢者の方の表情や芝生での活発な様子がよい。写真の雰囲気が全部明るく、写真を撮影した人の力量が伺える。 ●未来をテーマにいろいろな写真を入れて組み写真としたもの。デザインアイデアとして面白く、見ていて楽しくなる。組まれた写真それぞれがインパクトのある良い写真で長期計画のテーマにもあっている。芝生の写真はシャッターチャンス良い。 ●お年寄りの表情をうまく捉えた写真や、ローアングルから撮影することで水辺ラインの雰囲気がうまく表現されている船の写真など、一枚一枚の写真は非常に良い。しかしながら、狭いスペースに4枚のカット写真は多すぎて圧迫感を与える。子供が抱えているカット写真だけでも良かったかもしれない。4枚のカット写真を使うのであれば、写真構成をもっと大きくすべき。

第二席	区市町村名	日の出町
	広報紙名・掲載号	広報日の出 平成22年2月1日号
	意図	①新春に平井川の川原で行なわれる、どんど焼きを撮影しました。深く澄んだ夜明け前の空に、力強く燃え上がるどんど焼きの炎が、元気に駆ける子供たちを照らす光景を撮りました。 ②夜が開け、自治会の皆さんが作ったトン汁で暖まる光景を撮影。人々の温かさとやさしさを表現するため、被写界深度を浅くしました。また朝の空気感を表現するため露出も若干明るめにしました。 ③どんど焼きの火を使って自前のまゆ玉を焼きます。これを食べると一年間を無病で暮らせるそうです。②と同様の表現を考え、被写界深度を浅くしました。また朝の空気感を表現するため露出も若干明るめにしました。
	審査委員コメント	●どんど焼きにしては火の勢いや豪華さが足りない。まゆ玉の写真については、構図をもっと下げて焼いている網を撮影したほうがよかった。 ●どんど焼きの焚き火の写真が印象的であるのと、豚汁の入った大鍋の写真は気温は寒そうだけれど人々は暖かそうというのがよく表現されている。ただ、人物が後ろ向きなのが残念。もう少し顔が見えて表情を捉えられたらなおよかった。組み写真全体として、冬の中でのホッとした雰囲気があらわれている。 ●被写体に大小の変化がつけられており、写真構成のバランスが良い。写真の仕上げも良い。一枚一枚の写真が、どんど焼きの雰囲気をよく捉えられていて、一瞥しただけでも、今回のどんど焼きの行事がどのようなものだったのかがストレートに伝わってくる。

平成22年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部) 入選作品

組み写真の部 最優秀 あだち広報 平成22年12月10日号

あだち広報 平成22年12月10日号

生徒たちの喜びの声

自分たちで作った米が、いよいよ給食に登場！

「自分たちで作った米が、いよいよ給食に登場！」「自分たちで作った米が、いよいよ給食に登場！」

自分たちで作った米が、いよいよ給食に登場！

「自分たちで作った米が、いよいよ給食に登場！」「自分たちで作った米が、いよいよ給食に登場！」

空と風と緑の中で、私たちが学んだこと

「空と風と緑の中で、私たちが学んだこと」「空と風と緑の中で、私たちが学んだこと」

足立区はおいしい給食

「足立区はおいしい給食」「足立区はおいしい給食」

給食のメニューを作ってみよう

「給食のメニューを作ってみよう」「給食のメニューを作ってみよう」

今年はお米がおいしい

「今年はお米がおいしい」「今年はお米がおいしい」

今年はお米がおいしい

「今年はお米がおいしい」「今年はお米がおいしい」

今年はお米がおいしい

「今年はお米がおいしい」「今年はお米がおいしい」

今年はお米がおいしい

「今年はお米がおいしい」「今年はお米がおいしい」

今年はお米がおいしい

「今年はお米がおいしい」「今年はお米がおいしい」

今年はお米がおいしい

「今年はお米がおいしい」「今年はお米がおいしい」

今年はお米がおいしい

「今年はお米がおいしい」「今年はお米がおいしい」

平成22年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部) 入選作品

組み写真の部 最優秀 あだち広報 平成22年12月10日号

(1/17)



(2/17)



(3/17)



(4/17)



(5/17)



(6/17)



平成22年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部) 入選作品

組み写真の部 最優秀 あだち広報 平成22年12月10日号

(7/17)



(8/17)



(9/17)



(10/17)



(11/17)



(12/17)



平成22年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部) 入選作品

組み写真の部 最優秀 あだち広報 平成22年12月10日号

(13/17)



(14/17)



(15/17)



(16/17)



(17/17)



平成22年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部) 入選作品

組み写真の部 第一席 こうとう区報 平成22年4月1日号

こうとう 区報

NO.1646

平成22年(2010年) 4/1

毎月1日・15日の日曜日に発行
定価 100円(税別)
〒114-8555 東京都江東区有明1-1-1
TEL 3543-0111 FAX 3543-0112

みんなでつくる 伝統、未来 水彩都市・江東

江東区長期計画 策定

10年間はぐくむ江東区の未来

江東区は、平成22年度から平成31年度までの10年間の長期計画を策定した。この計画は、江東区の未来を明るく描き出すための指針となる。計画の中心は、地域の活性化と住民の生活の向上にある。また、環境の保全と持続可能な発展も重要なテーマとして掲げられている。

平成22～31年度

▲「開港」「みどり」「子ども」「国際」「経済圏」「環境」……みんなが大切に守り育てていこう

祝 新田佳浩 区長就任

江東区長 山崎 孝明

未来に向けた新たな道を切り拓くのが始まりです。

江東区は、長い歴史と伝統を誇る地域です。しかし、時代は大きく変わりました。新しい価値を生み出すためには、従来の枠組みを打破し、新たな挑戦が必要です。私は、この10年間の長期計画を通じて、江東区をより魅力的な地域にするためのリーダーとして、全力を尽くします。

まず、地域の活性化を図ります。観光資源の整備や、新しい産業の誘致に取り組むとともに、住民の生活の向上にも力を入れます。また、環境の保全と持続可能な発展も重要なテーマとして掲げられています。私たちは、未来を明るく描き出すために、互いに協力し合い、努力を怠りません。

この計画は、江東区の未来を明るく描き出すための指針となる。計画の中心は、地域の活性化と住民の生活の向上にある。また、環境の保全と持続可能な発展も重要なテーマとして掲げられている。

江東区長期計画の概要

1. 基本理念
2. 基本目標
3. 重点施策
4. 実施計画

この計画は、江東区の未来を明るく描き出すための指針となる。計画の中心は、地域の活性化と住民の生活の向上にある。また、環境の保全と持続可能な発展も重要なテーマとして掲げられている。

●●● みんなでつくる伝統、未来 水彩都市・江東 ●●●

平成22年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部) 入選作品

組み写真の部 第一席 こうとう区報 平成22年4月1日号

(1/5)



(2/5)



(4/5)



(3/5)



(5/5)



組み写真の部 第二席 広報日の出 平成22年2月1日号



平成22年度東京都広報コンクール 写真部門(組み写真の部) 入選作品

組み写真の部 第二席 広報日の出 平成22年2月1日号

(1/3)



(2/3)



(3/3)



映 像 部 門

〈映像部門 総評〉

●関委員

知られざる地域の歴史、文化、その伝承活動にスポットをあてたもの。地域の独自の目標に沿った施策にスポットをあてたもの。切実な解決すべき問題への取り組みのPR。レギュラー広報枠で複数テーマをニュース形式で伝えているもの。に分けられた。それぞれに意義あるが、厳しい時代にあっては、自殺防止、介護、環境、高齢者支援をテーマにした広報に心ひかれた。伝統文化・芸能の伝承活動も失われがちな人と人の絆の再生ととらえれば地道に取り組まれるべきと思う。審査に際しては、映像コンテンツの完成度もさることながら、区や地域の目標設定、取り上げるテーマの妥当性を重視した。全体を通じて、東京に暮らす人々の日々の頑張り、ボランティア精神、良質のコミュニケーションを多く拝見し、大都会にあっても人と人の絆が大切であると改めて感じられた。そのことを伝えるのに映像コンテンツは大きな力を持つと確信した。また、ネットの発達で大量の映像コンテンツがあふれる中で、時間を割いて見てもらう工夫はますます必要となってくるであろう。

●高橋委員

平成22年度の19の番組（作品）を拝見して感じたことは、題材的に例年よりテーマが絞られてきており、大きく分けてキーワードは「地域」、「高齢者」、それと「子どもたち」ということだと思います。これも時代の景色が色濃く反映された結果だという気がします。そのこと自体はある種の必然性の表れであり、地域の広報という性格上、当然の流れだと思います。次に番組の質ですが、去年ほどではないにしても手堅い演出で破綻が無く、高い水準を保っていると思います。しかし、裏を返すと企画的にも、演出・構成にしても、視覚的効果にしてもチャレンジしてない、もう一步を踏み出していない、という側面があります。個人的にはこのことは少し困った問題だと思っています。なぜなら、番組が面白くないからです。番組を見てわくわくしたり、興奮したりする方が広報効果も上がるに決まっています。そんなもの広報には必要ない、とお考えでしょうか？もう一步だけ前に出てみませんか？作る方も断然その方が楽しいですよ。委託されるプロダクションも、委縮せずに企画段階で広報担当者と十分その点を話し合っただけ欲しいと思います。そんな観点で拝見していましたので、ローリスク・ローリターンではない、福生市の番組を時間オーバーですが最高評価に推させていただきました。これをスタートするには勇気が要ったこ

〈映像部門 総評〉

とだと思えます。劇映画、と制作者の方は言われていますが、所謂ドラマ仕立てで、台詞を決めて子どもたちに語らせています。児童劇団の子どもでも相当クサくなって、普通なら失敗するところでしょうが、所謂素人の子どもが挑戦して見事に完遂しています。詳細は個別の講評で述べていますので省略しますが、結果、「基地の町・福生」というだけの私の偏見は吹っ飛び、住みやすい街、自然に溢れた町といったイメージに大きく変わりました。これは、広報とはいえ、人間の情感に訴えていかないと届かない、という当たり前と言えは当たりの帰結です。他にも、秀作は多々ありましたが、今回は敢えて総評でもこの番組を取り上げさせていただきました。次回、出品される方はちょっとだけ、その辺にも留意されると良いと思えます。皆さまの健闘を祈ります。

平成22年度東京都広報コンクール 映像部門 入選作品

最優秀

区市町村名	台東区
題名	台東スケッチ「おもてなしの支度」
時間・制作方法	14分・委託制作
主な内容	全国から、また海外からも多くの人を訪れる『台東区』。おもてなしを生業とする人々の『支度風景』を通じて、その人の考える『おもてなし』・『仕事へのこだわり』・『人とひととの繋がり』を探る。
制作意図	日々過ぎ去っていく日常生活の中でも、いろいろなおもてなしが存在するが、そのすべては『ありがとうございます。』の一言を発するためにつながる。しかし、そこに辿りつくまでのこだわり、考え方を番組を通じて感じてもらう。
審査委員コメント	●台東区ならではの3つのテーマを「おもてなしの支度」というくくり方で丁寧に映像化している。身近にある日本独特の文化・人情・匠の素晴らしさに気づききっかけとなっている。インタビューもいい話を聞きだしている。（関） ●海外からも多くの人を訪れる台東区。もてなすことを仕事とする人々の「支度風景」にこだわって描く彼らの日常である。主に外国人向けの旅館を営む「澤之屋」の老夫婦、『何も特別なことはしない、そのままで受け入れる』と言う。上野の和菓子屋「うさぎや」の主人は、おいしく和菓子を食べさせようと客にあれこれと注文する店として有名だ。浅草の若い芸者さんは心からの『ありがとうございます』を言えるように全てに気を巡らす。三題話だがいずれも小気味良い。シャイな江戸っ子のホントの心意気を見せてもらった。（高橋）

平成22年度東京都広報コンクール 映像部門 入選作品

第一席

区市町村名	足立区
題名	「気づく つながる いのちを守る」～足立区の「生きる支援」～
時間・制作方法	約10分・委託制作
主な内容	1年間に自殺でなくなる人の数は全国で3万人超。経済不況が続く中、自殺者は今後も増えることが予想され、対策は待ったなしの状態だ。 「自殺者を一人でも減らしたい…」その思いから、足立区ではいち早く「生きる支援」に取り組み、全国でも先駆的な自治体として注目を集めるまでになった。 区独自の自殺予防対策「都市型モデル」を構築するため、足立区ではいったい何が行われているのか？自殺対策の専門家や実際に自殺願望を持つ相談者などのインタビューを交えながら、足立区の「生きる支援」の現場を追った。
制作意図	全国の自殺者数は年々増え続け、歯止めが利かない。その対策は国を挙げた動きとなっている。その社会情勢を踏まえ、9月の自殺予防月間を前にタイムリーな映像番組を企画した。 「自殺」という難しいテーマであるために、あまり暗い印象を与えないように細心の注意を払った。 自殺に関連する問題はこれまで、行政が積極的に取り上げることの少ない、非常に繊細で難しい問題であった。「自殺は個人の問題」という偏見が、行政にも、国民にも根強く残っているのも事実だ。だが、足立区では負の部分隠すのではなく、あえてこの問題を前面に打ち出した番組に挑んだ。それに立ち向かう取り組みや人を真正面から紹介することで、考えるきっかけや気づきに繋がり、それが自殺防止に寄与できればとの思いを込めた。 今回の映像制作は、自殺対策を所管する保健予防課ではなく、シティプロモーション課が主導で行った。映像として広く流れるため、表現方法や相談者の声などの確認・調整作業は非常に困難なものであったが、担当所管が制作するものとはまた違った、深く切り込んだ内容に仕上げる事ができた。 制作を担当した職員は、(前所属の広報課時代を含め)3年間に及ぶ長期取材を行い、区の自殺対策を追った。その結果、番組に信憑性と深みを出すことができ、多くの区民に広く問題提起をすることができた。
審査委員コメント	●全国でも先駆的に取り組んでいる「生きる支援」自殺予防対策をテーマに3年間に及ぶ長期取材での力作。自殺対策を切り口に、地域をもっと住みやすい場所に変えていく。ライフリンクの思想と連携しゲートキーパーとしての責任と具体策がわかりやすく紹介されている。(関) ●喫緊のテーマとして自殺者を水際で食い止める「ゲートキーパー」の活動ぶりに焦点を当てて区民に問題提起した意欲作。不況の中で自殺者は連続で3万人を超え、今年も減る気配は無い。足立区では一人でも自殺者を減らすべく、いち早く「生きる支援」に取り組み成果を挙げている。窓口相談に来る人はざりざりの人が多く、対応するゲートキーパーとの緊張感が直に伝わってくる。ちょっとした「気づき」を地域全体で共有する大切さを痛感した。難しいテーマに敢えて取り組み、個人情報などの壁も乗り越え番組化した勇氣にも敬意を払いたい。(高橋)

平成22年度東京都広報コンクール 映像部門 入選作品

第二席

区市町村名	江戸川区
題名	えどがわ区民ニュース平成22年6月号特集 守る 創る 語り継ぐ 環境ををよくする運動40年のあゆみ
時間・制作方法	23分43秒・委託制作
主な内容	「ゆたかな心 地にみどり」を標語に掲げ、昭和45年に始まった「環境をよくする運動」が今年で40周年を迎えました。 区民と区が協力し、まちの環境をより良くするため共に歩んできた40年の道程を、運動創設当初を知る方に伺いながら振り返ります。 「葛西地区ゴミ公害問題」、「航空機騒音問題」など、過去江戸川区を揺るがした大問題を乗り越えながら区民と区が団結していく過程、多くの区民の手によって豊かな環境が創られてきた過程、そして、大きく広がった現在の活動の姿や今後の展望を紹介します。
制作意図	「環境をよくする運動」は江戸川区民、そして江戸川区にとってとても大切な取り組みです。 まちを愛する区民の皆さんと区が手を携え活動してきた40年間の歩みは、現在の住みよい江戸川区の環境、そして区内で行われている地域力を活かした様々なまちづくりの基礎を創り、育んできました。 今回の番組では、そうした「環境をよくする運動」の原風景や乗り越えた困難、そして運動の歩みを体験者のインタビューや資料を通して明らかにし、活動の根底にあるところを視聴者に知ってもらい、区政への理解を深めてもらうこと、運動の意義を知らない若い世代に伝え、活動のさらなる進展に役立つ番組とすることを目指し制作に取り組みました。
審査委員コメント	●江戸川三大公害を克服した区と区民の「環境を良くする運動」を歴史を追って描くことで継続すること、区民が結束することの大切さを伝えている。奇をてらわない正統的な作りだが見やすくわかりやすい。（関） ●「環境をよくする運動」というややベタな運動名だが、江戸川区ではこの運動に環境問題を集約させていて、活動方針は緻密で論理的に組み立てられている。まず、40年の歩みを綴る記録フィルムに圧倒される。現在のテーマとしては不法投棄問題、羽田への航路としての騒音問題などが描かれ、しっかりした測定もまじえて全体に非常に丁寧なつくりになっている。（高橋）

平成22年度東京都広報コンクール 映像部門 入選作品

第二席

区市町村名	福生市
題名	福生市制施行40周年記念映画 ぼくのまち わたしのまち 福生
時間・制作方法	39分・委託制作
主な内容	晃一は福生市に暮らす中学3年生。「思い出に残るものを作りたい」と小・中学生の仲間6人で福生市の行事や風景を取材し、ビデオで撮影していく。やがて、市民の文化祭が行われる市民会館で発表することになるのだが、失敗をしながら取材をしていくうちに福生のさまざまな人たちと出会い、郷土の歴史や文化、「協働」という福生市の特徴など、これまで知らなかった福生の魅力を発見し、福生に住んでいることの誇りを感じるようになっていく...
制作意図	子どもたちの視線から見た福生の魅力、市民のあまり知らない福生の魅力、協働及び環境をキーワードとしながら、市制40周年に当たり、10年を振り返るうえでの映像資料とし、その成果や課題、現状を紹介するとともに、「誰もが住んで良かった、住みたくなる夢のある街福生」というメッセージを将来に向けて発することを目的とする。なお、手法は劇映画とし、キャスト及びスタッフは原則として市民の公募による。
審査委員コメント	●市民の知らない福生の魅力を良く伝えている。「協働」というキーワードがDVD制作の過程でわかってくる構成は良くできていた。区民参加の力作となっているが関係者以外が見たとき、手法として少し回りくどい印象があった。（関） ●小・中学生がビデオ制作をする、というとまたか、と思うが福生の場合は一味違って、更にドラマ仕立てでことが運ぶ。たどたどしい台詞のようなもので続いていくが、これが不思議と嫌味が無いのだ。筋も殆ど無く、とりとめも無く進行するが、何故か目が離せない。それは時間が経つにつれてスタッフをやる小・中学生の成長ぶりがあり、それを筋とは関係なく見る方がほっとして感じるからだろうか。特に「源氏蛍」のシークエンスは秀逸で心に残る。「協働」の意味を探るのも面白い。結果として、福生のイメージアップには大いに貢献したのではないかな。（高橋）